

# ウィトゲンシュタインの規則遵守論における 「実践」と「生」

平 賀 直 哉

## 1 はじめに

「規則に従う」ということは一つの実践である<sup>1</sup>。これがウィトゲンシュタインの『哲学探究』（以下『探究』と略す）における規則遵守の問題（以下「規則遵守論」と呼ぶ）の核心だと言ってよいであろう。しかし、一見するとこの主張はあまりにも当たり前のことを言っているようにもみえる。実践という語がおおよそ実際の行為ということを意味しているとして、規則に従うことは我々が実際におこなうことなのだ、ということは自明である。例えば、交通規則に従うということは我々の行為の一つであり、このことを疑うことは難しいように思える。では、なぜこの自明なことが規則遵守論の核心となっているのか。この点を理解するためには、『探究』の文脈を考慮に入れる必要がある。

クリプキによって知られるようになったとおり、規則遵守論においては一つの強力なパラドクスが登場する。「いかなる行為の仕方も規則に従いうるし、また規則に反しうる」という規則のパラドクスは、185節から先の核心部が登場する202節までにおいて主題として論じられ、201節において定式化されたものであった。このパラドクスの誤解を解消し、まさにこれに代わるものとして提起されたのが先の「実践」という概念であった。パラドクスを生じさせる考えには、この実践という概念が欠けてい

1 『哲学探究』 § 202。以下、特に断りのない節の引用は、全て『哲学探究』からのものである。

た。では、実践概念が欠けるとどのような事態に陥ってしまうのだろうか。185 節から 201 節までを規則遵守論前半部、202 節から 242 節までを後半部と位置づけ、まずはパラドクスに関する前半部の議論を要約することにした。その過程で実践という概念の重要性を確認した後、具体的にこの概念の意味を考察していく。そして最終的には、実践を包括する「生」というより広い視野のもとで規則遵守という問題を考えるためのいくつかの示唆を与えることを試みる。

## 2 規則遵守論における「実践」の位置づけ

前半部は、数列を書くという規則遵守に関する奇妙な例から始まる。「+ 2」という規則に対して、1000 を超えた段階から突然我々の適用の仕方とは異なった適用をおこなってしまう生徒の例である。すなわち、1000 までについては「+ 2」を正しく適用できる生徒が、1000 を超えると突然 1000, 1004, 1008, 1012…と書いてしまう。このとき、その規則に関するいかなる説明を生徒に与えても、彼は一向に我々と同じ行為をおこなわない。ところが彼は、自分はずっと同じことを続けているのだと主張し、自分の行為はその規則に従っていると言い張る。

同じような数列の例は、143 節ですでに扱われている。そこでは、規則を教えるはじめの段階において（「+ 2」で言えば 0, 2, 4…という段階において）、生徒がその規則を理解しているか否かは、その生徒自身の行為に依存しているということが言われている。これに対して 185 節の例の特異な点は、規則を理解していると思われた人間でさえも、ある段階で突然逸脱した行為をおこなうということである。というのも、規則は一般的であるが、しかし適用は個別的であるため、いまだ規則が適用されたことのない段階が存在するのであり、その段階において我々がいかに行為するかということはその規則をいかに解釈するかという仕方に依存しており、その解釈が偶然これまでに於いて我々を一致せしめていたとしても、新たな適用において一致を保証するとは限らないからである。「+ 2」という規則は、その規則に対する全ての適用そのものの記述ではない。すなわち、それは「0, 2, 4, 6…」という数列の無限の展開の記述ではない。規

則はそこから個々の適用が導き出されるような、一般的な事柄を扱っている。そこで、我々は規則に従う際、その一般的な規則から、個々の適用をそのつど導かなくてはならない。すると、我々が1000までという有限の段階において一致していたとしても、どうして「+2」の規則において1000の次の適用が1002となるのかという問いが立てられうることになる。ここには規則に関する解釈の生じる余地があり、その解釈によってはいかなる行為も正しい適用とされるのではないか、ということである。

この問いに対して新たな説明を与えることは可能である。例えば、「「+2」とは1を二回加えよということであり、1000に1を二回加えたら1002となるからである」というように。しかし、この説明もまた一般的なものであり、解釈の入り込む余地が生じる。それが説明であるかぎり、どこまでも解釈の余地が存在し続けてしまう。

前半部の議論は、規則と適用との間に存在するこのような溝を埋めようとする試みと、その批判に当てられている。その試みの主なものは、心的概念を援用しようとするものである。これを本稿では「心理主義」と呼ぶことにしよう。規則に従う際、我々はその規則に対しておこなうべきことを心に思い浮かべ、そしてその思い浮かべたとおりに行為する。つまり、この思い浮かべられたもの、すなわち思念と一致するような行為こそ正しい行為と言えるのではないか。ところがこの試みにおいても同様の困難が存在する。このときの思念は個々の適用そのものの思念であるのだろうか。すなわち、我々は「+2」に従う際、例えば2に「+2」をおこなって4を算出するときにも、1000036の次は1000038であるなどといった無限の適用を頭に思い浮かべているのだろうか。しかしそれは受け入れ難い想定であろう。そうではなく、もっと一般的に、例えばそれぞれの数の後にそのつど2を加えるべきであるといったことを思い浮かべていると考えるのが自然であろう。すると、先と同じ問題が生じる。その一般的な思念が個々の適用において1002を書くべきであるということをいったいどのようにして示すことができるのか。

このようにして、前半部では規則から我々の適用を導こうとする試みがくじかれ、ついにいかなる行為も規則と一致しうるし、反しうるというパラドクスが生じる。そしていま見てきたとおり、このパラドクスは、規則

が適用に先だって成立しているという見方に立って規則遵守を説明しようとしたことから生じた（そして思念等もまた同様の事象と想定されていた）。そこで、規則と規則に従うこと（規則の適用）を切り離さずに「規則に従う」ということを展望する新しい視座を与えたのが、202 節での「実践（Praxis）」という論点だったのである。適用から切り離された規則の意味を考えるとパラドクスが生じる。それを避けるにはそもそも「規則」や「規則に従う」という概念をそれらの本来の場所に連れ戻さなければならない。その本来の場所が実践である。すなわち、規則は我々が規則に従うところ（実践としての適用）でしか意味を持ちえないのであり、それゆえ規則という概念は我々の実践という概念と不可分であるという視座が示されたのである。

ところで、こうした実践という概念の重要性自体は規則遵守論の解釈においてしばしば言及されてきた。それにも関わらず、この概念が実際のところ何を意味するのかと問うてみると、大方の解釈はその明確な意義を与えてくれないのが実情である。肝心のウィトゲンシュタインがこの概念について何の説明もしてくれないので、それを解釈するのにどのような態度と方法を取ればいいのか、そこからはじめなければならない。

そこで本稿では、この実践という概念がそこに位置している『探究』の文脈から理解することにした。着目すべきは「実践」の重要性が説かれた 202 節からの後半部である<sup>2</sup>が、しかしこの範囲は一見すると当たり前とも思えるような事柄が延々と述べられているように見え、「実践」についても正面から言及されてはいない。こうした理由から重要な研究対象に位置づけられることの少なかった後半部であるが、しかし本稿では、この箇所を主たる考察対象にする。

前半部が誤解の発生とその誤りの究明、そしてそれを定式化して最終的に解消することにあるのに対して、これに代わる正しい規則遵守の考え方を実践という概念によって提示する後半部、202 節以下においては、規則遵守についてほとんど初めて肯定的な見解が述べられていく。すなわち、

2 とはいえ、規則遵守論を明確に二つの場面に区切ることはできない。実際、「実践」という語は前半部の終わり（197 節）においても登場しており、この節辺りから緩やかに論点が以降し始める。そして本格的に「実践」を取り扱うのが後半部と解釈する。

規則遵守に関わる諸概念を取り上げ、それらの概念の働きを言語ゲームのなかで正しく見ることによって、規則に従うということの意義を改めて確認していくのである。それは規則遵守を「実践」という概念によって定義するためではない。語の連関を見るというウィットゲンシュタインのやり方は独特であり、この規則遵守の概念との概念的連関にある諸概念を提示し、実践としての規則遵守という概念がその中心に浮かび上がるかのように示しているのではないか、と思われる。その概念は我々の言語ゲームにとってあまりにも根幹に位置しているため、かえって当たり前に見えてしまうのではないだろうか。しかし、奇妙なパラドクスを経た後、言語ゲームを正しく見定めるには、この根源性を再確認することに重要な意味があると思われる。以下しばらくは、後半部におけるこうした実践としての規則遵守に関わる考察をしていくことにする。

### 3 実践的諸概念

「実践」に関する立ち入った文脈的・概念連関的な考察はこれからおこなっていくものとして、さしあたりは実践とは「我々が自立的に行為すること」といった具合に理解すれば誤りではないであろう。ここで「自立的」という語を用いているのは、奇妙な数列の例が初めて登場する 143 節において、次のような想定がなされるからである。教師は初めに生徒の手をとり、正しい数列を書くように導く。そしてその後に教師が注目するのは、続けて彼が自立的に (selbständig) 書き続けているか否か、ということである。教師が彼の手を取って無理やり「1002」と書かせる段階に留まっていたら、「生徒が規則に従った」とは言うことはできない。最終的に、生徒は自立的に規則に従わなければならないのである。更に、「導かれる」ものとしての規則遵守という誤った考えを批判する文脈<sup>3</sup>に続いて生じたのが 185 節以降の規則遵守論であるため、生徒は導かれるものではなくて自ら行為するものとしてあるという「規則遵守」の概念が提起されるのはむしろ自然なことだと言えよう。この特徴を「自立性 (Selbständigkeit)」

3 § § 162-178.

と表現する。規則遵守という実践は「自立的に」行為されなければならないということが、実践における第一の特徴となる。

では、ここからしばらくは『探究』の文脈に沿ったかたちで登場してくる様々な実践としての規則遵守に関する諸概念（これらを「実践的諸概念」と呼ぶ）を取り上げ、その意義を考えてみたい。前半部の終わりから徐々にそのような概念が取り上げられてくる。197 節において「実践」概念を提起した後で、198 節、199 節においてウィトゲンシュタインがまず吟味するのが、たった一人の人間がたった一度だけゲームをおこなうことができるのか、という問いである。ゲームをおこなうことは、ここでは規則に従うこととの類比で論じられている。一度だけ規則に従うことはできるのか。規則に従うということが思念に導かれることだとするならば、それは可能であるように見える。というのも、そのときには例えばある人がふとチェスの規則を思いつき、その規則に従って彼がポーンを動かし、その後は誰もチェスをおこなわなかった、ということも可能だろうからである。しかしこの想定は、既に何度も使用された制度としてのゲームである我々のチェスを念頭においているから可能に見えてしまっているのであって、思念という概念からのみでは、こうした制度としてのゲームという側面は得られない。そして、その場合にはその行為の正しさを判断する規準は存在するのだろうか。ただ一人の一回だけの行為について、もしその正しさを問うならば、正しさはその行為者の裁量次第ということになる。しかしそれでは正しさの規準は存在しないということと等しく、規則遵守とは言えない。したがって、ある行為について規則に従っていると言えるためには、その行為は通時的に反復してなされなければならない。すなわち、規則遵守は「慣習 (Gepflogenheit)」や「制度 (Institution)」のもとでなされる必要がある。これが規則遵守という実践に関する更なる特徴である。

更に、こうした概念とともに登場するのが「技術 Technik」という概念である。「慣習」や「制度」については通時的な特徴を表していると理解できるが、「技術」に関してはやや使われ方が異なる。では、この概念をどのように理解すべきだろうか。ベイカーとハッカーは「技術」をおおよそ「様々な場面で規則を適用する仕方」として理解していると推測できる<sup>4</sup>。

4 Baker and Hacker, 1985, p. 161 などを参照。

すると、「様々な場面で」という表現により、「慣習」や「制度」と同様、ベーカーとハッカーは「技術」についても「通時性」をもった概念として理解していることになる。確かに、この見解は誤りでないだろう。しかし、更に掘り下げて、他のものから区別されたこの概念の特徴を調べてみたい。

まず、規則遵守論の他の箇所では「技術」が登場する場面として、232節が挙げられる。その要旨は次のようなものである。通常の規則遵守と異なり、インスピレーションに従うものとして（心理主義的に）規則遵守を考えてしまうと、他の人に自分の「技術」を教えることはできないことになってしまうであろう（しかし実際にはそんなことはない）。こうした内容から見て、まず「技術」とは本質的に他人に教示できるものとして想定されていることがわかる。

更に、『探究』の規則遵守論以外にも目を向けてみよう。『探究』において洗練された形で登場する規則遵守論は、『数学の基礎』にその議論の原型を見て取ることができる。そこで、本稿においてもしばしばこの著作を参考することにする。当該の「慣習」「制度」「技術」に関する議論についても、原型と思われる箇所が存在する<sup>5</sup>。そしてそこで登場するのが、「計算技術」という表現である。そして、原型となる箇所の直前に、ウィトゲンシュタインがまさに「技術の本質」について語っている箇所が存在する。それを見てみよう。

もし我々が、数学的命題は次のような意味で予言だ、と言ったとしたらどうだろうか。つまり、数学的命題は、この技術を学んだことのある社会の構成員が、その社会の他の構成員と一致してどのような結果を得るのかということを予言する、という意味で。こうして、「 $25 \times 25 = 625$ 」は、もし我々がある人々を乗法の規則に従っていると判断するならば、そのような人々は  $25 \times 25$  をおこなったときに、625 という結果に至るだろうということを意味するのだろう。—これが正しい予言だということは疑問の余地がない。そしてまた、計算が本質的にそのような予言によって基づいているということも疑問の余地がない。すなわち、

5 *Remarks on the Foundations of Mathematics* (以下 RFM), pp. 193-194.

もし我々が確かさを持ってそのような予言をおこなうことができないのであれば、我々はそれを「計算」とは呼ぶべきでないだろう。このことが実際に意味しているのは、計算が一つの技術だということである。そして我々が語ったことは、技術の本質に属している。

ここにおいて、計算技術の一つの本質的な側面が語られている。それは同じ技術を有する人間がこれからどのように行為するのかということを示言できるということである。すなわち、現段階での行為について規則に従っているか否か判断できるだけでなく、これからその規則に従えばどのような結果が生じるのか、ということも語ることができる。これは「思念」や「直観」によって規則遵守を説明する試みにおいては欠けている側面である。そのため「技術」は単に通時的な側面を述べたものではない。むしろ、他の人にその技術を教えられるということ、他の人間と同じ技術を共有できること、そして同じ技術を持つ彼らについて行動を予測できるということが、「技術」の特徴と言える。「たった一人の人間がたった一度だけ規則に従うことはできない」というとき、「慣習」や「制度」がその「たった一度だけ……できない」という面に重点を置いていたのに対し、「技術」は「たった一人の人間が……できない」という面に重点を置いていたと言えるのではないだろうか。というのも、上記の引用に従えば、誰にも共有されない一人だけの「技術」という概念はありそうもないからである<sup>6</sup>。こうして、規則遵守という実践は通時的であり、そしてまた本質的に他人と共有されうるものだということがわかる。

『探究』の続きの箇所へと移ろう。続いて次のような問題が問われる。もしある民族がある音声を発していて、またその音声とともに彼らは活動をおこなっており、その活動は論理的と思われ、その音声を失うと彼らの行動は混乱に陥ると想定しよう。ところが、彼らの音声と活動との間には、いかなる連関も見出されなかった。言葉と行為との間に「規則性

6 更に言えば、こうして「技術」は後に登場する「一致」との関連性が認められる。というのも「一致」もまた、他の人々との間の関係を述べた概念だからである。実際、上の引用やそれに続く『探究』の原型となる箇所においても「agreement」や「consensus」がたびたび登場している。この「一致」については後に論じる。

(regelmäßigkeit)」が存在しないのである。さて、このときこれを「言語」と呼ぶことができるだろうか。

できない、というのがウィトゲンシュタインの答えである。「我々が〔それを〕「言語」と呼ぶためには、規則性が欠けている<sup>7</sup>。」たとえそれが慣習のもとでなされていても、言語が言語であるためには（あるいは規則が規則であるためには）行為との間に規則性という連関が生じていなければならない。例えば、「+ 2」という規則においては、その規則に従う行為はそれぞれ規則的でなければならない。こうして、実践に関して新たな特徴が付加される。規則に従うという実践は、規則と行為との間に「規則性」をもってなされなければならない。

そしてまた、「同じ」という概念も扱われる<sup>8</sup>。ある特定の規則に従っている様々な行為について、それらはみな「同じ (gleich)」行為であり、言い換えれば「同等性 (Gleichheit)」を持つと言うことが許されるであろう。0の次に2を書くことと、2の次に4を書くことは、「+ 2」という規則に関する限り、同じことをおこなっていると言える。こうして、規則に従うという実践は同じ規則に対して「同じ」行為がおこなわれなければならないことがわかる。

これまでの考察は、とりわけ実践における各行為のあり方に関する概念の考察であった。次は、少し違った観点から実践を捉えることになる。そもそも規則に従う行為というものは我々にとってどのように見えるのだろうか。

238. 規則が全てその帰結文を前もって産出していたかのように私に現れてくることができるようには、規則は私にとって自明でなければならない。この色を「青い」と名付けることが私にとって自明であるように、自明でなければならない。（これが私にとって「自明」なものであるための規準。）

こうして、規則に従うという実践において、規則はそれに熟達している

7 § 207. なお、きっこう括弧内は本稿筆者によって補った。

8 § 215 を参照。

者にとって「自明性 (Selbstverständlichkeit)」を持っていなければならない。では、自明であるとはどのようなことだろうか。続く 239 節において、「赤」という音声を聞くとときどの色を選ばなければならないかということを知るためには、「赤」という語以外の別の規準を必要としない、という趣旨が述べられる。このことと 238 節から推測できることは、我々にとって「自明」である語は、その語が何を指しているのかということについて更なる規準を必要としないということである。とりわけ規則に関してウィトゲンシュタインの別の表現を借用すれば、「我々はただ規則が語ることだけに注目し、行為するのであって、いかなる更なる手引きにも訴えない」<sup>9</sup>ということになるだろう。我々は規則に習熟している限り、それを眺めれば自ずと正しい行為を把握するのであり、そしてそれは我々にとって奇妙なものでも驚くべきことでもなく、「自明」なものとして、我々に馴染んでいる。このように、規則自体こそ我々の規則遵守という実践のための最も根源的な手引きであるという規則の根源性を、この自明性を考慮に入れることによって確認することができる。

「自明性」をさらに詳しく考察するために、『数学の基礎』の次の箇所を取り上げよう。それは数学の公理は自明である、ということはいかなることか、という問いに続く箇所である。

私はこう言いたい。例えば平行線公理の言葉が与えられる(そして我々がその言語を理解する)とき、この命題の適用の仕方、したがってその意味は、未だまったく規定されていない。

そしてその命題は我々にとって自明だと言うとき、我々はこのことによって知らないうちに、その命題の特定の使用法をすでに選んでいるのである。我々がその命題をまさにそのために適用するのでなければ、その命題は数学の公理ではないのである。

すなわち、我々がここで実験をおこなうのではなく、自明なものを承認するのだということが、すでにその適用を確定しているのである<sup>10</sup>。

9 § 228.

10 RFM, p. 224.

『探究』の議論が「規則の自明性」について問題としていたのに対し、『数学の基礎』からの上の引用が「公理の自明性」を問題としているという点で、問題の焦点は一致していない。そして「公理」について本稿で踏み込むことはできない。そのため、引用の内容について深くは立ち入らず、あくまで上から「自明」についてわかることだけを取り上げることになろう。まず、「自明性」について語るとき、これは「当たり前であると感じられる」といった我々の心理的な特徴を述べているのではなく<sup>11</sup>、公理が自明であるとは、その使用法が確定されているということだということがわかる。これを規則についても当てはめることができるのであれば、規則が自明であることは、その遵守の仕方が確定されているということになるだろう。いまだ我々の規則でないもの、例えば暗号や未知の民族の使用する言語は、我々にとって使用法が定まっておらず、そのため様々な解釈が存在しうる。しかし、我々の規則は自明であるから、解釈の余地のある規則は(例外はあるだろうが少なくとも通常は)存在しない。もしもそれが自明でなく、様々な解釈されうるものとなってしまうと、もはやそれは「規則」とは呼ばれないであろう。いかなる行為も解釈の仕方によっては規則に従っているのではないかというパラドクスは、規則におけるこの自明性を取りこぼしてしまっていたと言えると思う。

#### 4 概念の相互規定関係

こうして、規則に従うという実践と結合された諸概念を一つ一つ取り上げてきた。その結果、規則に従うとは、自立的に、慣習や制度のもとで、技術として、規則的に、そして同じように、規則を自明なものとして、行為することだと解釈した。最後にもう一つ概念を取り上げたい。それは「一致 (Übereinstimmung)」という概念である。

ウィトゲンシュタインはこれらの概念を比較的緩やかに使用しており、厳密な境界を引いているとは考えがたいため、簡単には区分できないが、おおよそ次のようなことは言えると思う。もともと「思念 (Meinung)」

<sup>11</sup> RFM 第3部1節を参照。

や「直観 (Intuition)」においては一回の行為と規則との間の連関が問題となっていたのに対し、実践的諸概念を強調することで、「慣習」等においては通時的で反復的な特徴を加えた。そしていま取り上げた「一致」というのは「技術」と同様、同じ規則の異なる段階における適用ではなく、同じ規則の異なる行為者における適用の関係を示す概念である<sup>12</sup>。つまり、規則に従うという実践において、同じ規則に従っている人々の行為はみな「一致」していなければならない、と言うことができよう。ただし、これまでの規則遵守論解釈からして、この「一致」概念は慎重に扱われる必要がある。

そこで、これまでの規則遵守論解釈の流れを少々眺めることにする。この議論の火付け役であるクリプキも、この「一致」という概念に着目している。彼は、共同体において一致した行為をおこなうことなしには、その共同体において規則の言語ゲームは存在しえないだろう、という趣旨のことを述べており、規則の正しさという概念に関して人々の一致が本質的な重要性を持っていることを認めている<sup>13</sup>。マッギンはこの立場を批判し、「一致」は規則を複数人が共有する際には必要だが、しかし規則の成立そのものには本質的な役割を持たない<sup>14</sup>と考えた。これに対して、マルコムは、実際に共同体において人々が一致しているという前提が存在している限りで、規則の意味が確定されるのだ<sup>15</sup>、という立場にある。こうして、一致解釈はとりわけ多種多様なものとなっている。

しかし、次に挙げる 224 節に述べられているとおり、まず確認すべきは「一致」という概念が規則遵守において欠かすことのできないものだと

12 とはいえ、これ以外の意味で「一致」が使われている箇所も存在する。例えば 201 節において規則のパラドクスは、「行為の仕方」と「規則」との一致という表現で表されており、ここでは異なった関係について「一致」概念が使用されている。しかし、規則遵守論においてこの概念が最も深刻に登場するのは 240-242 節であり、ここでは主に人々の間の一致が問題となっている。

また、こうした「Übereinstimmung」の多義性により、「一致」というほどの厳格さは含まれておらず、より緩やかな意味を持った「調和」と訳すほうが適切と思われる箇所も存在する（とりわけ後で述べる「生」に関する言明において）。しかし、本稿では一貫して「一致」と訳すことにする。

13 Kripke, 1982, p. 96 などを参照。

14 McGinn, 1984, p. 130 を参照。

15 Malcolm, 1989, p. 175 を参照。

ということである。

224. 「一致」という語は、「規則」という語と互いに血縁関係にある。それらは従兄弟同士である。私が誰かにそのどちらか一語の使用を教えるとき、それによって彼はまたもう一方の語の使用も学ぶのである。

また、この節は、ベイカーとハッカーの指摘<sup>16</sup>のとおり、元の草稿の対応する箇所が行為における一致と判断における一致に関する議論に続く位置にあり、そしてこうした用法における「一致」は、240節から242節のように、人々の間の一致という意味で使用されている。また224節の最終版は242節の最終版に続いている。このような根拠から、224節における「一致」は人々の間の一致を意味していると解釈することができよう。すると、マッギンの説は退けられなければならない。というのも、224節に従えば、もし我々がある記号に対して一致せず、まったくばらばらに反応してしまったら、それはもはや「規則」とは呼べないであろうからである。したがって問題は、「一致」と「規則」という概念が切り離せない関係にあるとした上で、それらが血縁関係にあると言うとき、その関係をできるだけ精密に記述することにある。上記の解釈者のうちでもっともわかりやすい説明はマルコムのものであろう。つまり、とにかく何かしらの要因のために我々は一致して行為するのであり、その基盤のもとで我々の規則が成立しているのだという、「一致」を規則遵守の成立のための前提条件として考える解釈である。

しかし、この解釈には一つの疑念が生じてくる。次のような想定を試みよう。ある集団が何らかの記号に注目し、それから各人が数列を書き下していく。彼らはみな、1000までについては0, 2, 4, 6… 996, 998, 1000と書いた。続けて次の数を書いてみると、ある人は1002と書き、またある人は1004と書き、また別のある人は1000036と書いたとしよう。こうして、それぞれの人が異なる数を書いたとする。このとき、彼らは同じ規則に従っていると言えるだろうか。

16 Baker and Hacker, 1985, p. 219 を参照。

言えない、とするのがマルコム立場であり、およそ一致を規則の成立条件とする人々の立場であろう。なぜなら、彼らによれば我々の一致という基盤のもとで規則が成立しうるのであり、この例においてはその一致が成り立っていないのだから。しかし、この例においては本当に一致してはいないのだろうか。確かにここで問題となっている規則が「+ 2」というものであったならば、1002 を書く人が正しいのであり、1004 や 1000036 と書く人は誤りだという点で、一致して行為してはいない。しかし、もし規則が「+ 2n (n は自然数)」であったならば、彼らはみな正しいのであって、みな一致して行為していると言わねばならない。すなわち、「一致」の意味を規定しているのは他ならぬ規則だということになる。「私が誰かにそのどちらか一語の使用を教えるとき、それによって彼はまたもう一方の語の使用も学ぶのである」という 224 節の言葉は、まさにこのことを意味していると思われる。マルコムらの立場の誤りは、「一致」という概念が「規則」という概念よりも以前に規定されていると考え、その意味をもとに「規則」の意味を規定しようとした点にある。しかし、「一致」の意味を知るためには、その状況において何を「一致」と呼ぶのかを規定する「規則」の意味を知っていなければならないという限りにおいて、これは循環であろう。彼らの議論は、一致なしに規則に従うことはできないという正しい見解に基づいている。しかしこのことは、これら二つの事象の因果的な連関を示しているのではなく、これら二つの概念の意味規定の関係、つまり文法的関係を示しているのである。そしてこの関係は、ウィトゲンシュタインの言うとおりに、一方向のものではなく、相互的なものだろう。「一致」なしには「規則」の意味は規定されないが、同時に「規則」なしには「一致」の意味は規定されない。これが「血縁関係」の実質的な意味と思われる。「夫」と「妻」は互いに意味を規定しあっているが、どちらの意味が先に規定されているのでもない、ということと類比的に考えられるだろう。

概念の相互規定について、さらに「一致」以外についても考えたい。例えば、先の 224 節の直後に次のような節がある。

225. 「規則」という語の適用は、「同じ」という語の適用と織り合わさ

れている。（「文」という語の適用が、「真である」という語の適用と織り合わされているように。）

この節を先のような相互規定の記述として考えることがいまや可能であろう。すると、「一致」だけでなくまた「同じ」という語についても相互規定が言われていると考えられる。さらに、208節においては「規則」の意味を「規則性」によって説明することに対する批判的な問いを提起している。こうしたことから、（「慣習」や「自立性」といった全ての概念に当てはまるとは言わないまでも）実践的諸概念のうちいくつかのものにおいて「規則」との間に相互規定が成立していると言うことができるだろう。すなわち、「同等性」や「規則性」をもとに「規則」の意味を規定することはできない。例えば0の次に2、その次に4と書き、1000の次に1002を書くことが規則的であって、1004と書くことが規則的でないことは、「+2」という規則を理解する以前に自ずから明らかであるように思われるかもしれない。しかし、奇妙な生徒は0, 2, 4, ..., 998, 1000の次に1004を書くことが「規則的」と主張するだろう。したがって、「規則」を学ぶことが、その規則において「規則的」であることが何たるかを学ぶことなのである。そして同時に、「規則的」でない規則遵守は存在しない。こうして、「一致」のみならず「規則性」についても相互概念規定が存在する。こうして、185節の生徒のように、もしも同じ規則を遵守する際に違った行為をおこなってしまったとしたらどうなるのか、という問いに対しては次のように答えたい。同じ規則に従うとき、違う行為をおこなうことは文法的に不可能である。なぜなら、違う行為をおこなう限りにおいてそれは同じ規則に従ってはいないからである。これは「独身の夫がいたらどうなるのか」といった問いと同様に無意味であり、単に問いに生じている語の意味の誤解に基づいている。そのため、このような問いを懸念する必要は本来なかったと言いたい。

## 5 「生」の概念

再び「一致」の問題に戻ろう。規則の意味は、その実践によって規定さ

れていた。例えば、「+ 2」においては我々がその規則から 1000 の次に 1002 を書く、という実践によってである。ここで、次の節を取り上げたい。

234. しかしまた、我々が計算するように（全ての人が一致しながら、等々）計算し、そしてそれにも関わらず各段階で、魔法によるように規則によって導かれているという感情を持っており、我々が一致しているということにおそらく驚かされる、ということは可能ではないのか。（この一致を例えば神に感謝しながら。）

ここで考えられているのは、我々が同じ規則に従う際、どうして我々が一致して行為するといったことが生じているのか、という問いである。この問いは、先の実践的諸概念と規則との間の文法的関係を、単なる経験的・因果的な関係と誤解したことに起因する。規則に従うと、いわば偶然的に我々が一致してしまうということに驚かされているのである。しかし、むしろ規則に従うならば我々は一致するというのは必然的なのであり、もし一致していないのであればそれらの行為を規則遵守とは呼ばないのだ、というのが本稿の主張であった。

こうして先の問いは誤解に基づいているが、これに対してウィトゲンシュタイン自身の応答は次のようなものである。

235. そこからあなたはただ、日々の生の中で我々が「規則に従う」と呼ぶものの外観に属するものを見ているに過ぎない！

あまりにも簡潔な文章のため様々な解釈が可能であるが、要するに「規則に従う」ということについて、その表面的な事柄しか見て取らず、その本質、すなわち文法を理解していなかったことへの批判と取れるのではないだろうか。むしろここで着目したいのは、「日々の生」という表現である。この節において、我々は日々の生の中で「規則に従う」と語るのだ、ということが明らかになる。すなわち、これまで実践という単純化された行為に限定して考察されてきたのだが、「生」というより広い観点からこの問題が捉えられてくる。実際、これまで規則遵守論においては登場して

こなかったこの「生 (Leben)」という語は、規則遵守論の結論に位置する 240-242 節の非常に重要な箇所です。再び登場する。

241. 「すると、あなたは何が正しく、何が誤りであるのかを、人間の一致が決定する、と言っているのか？」——正しい、あるいは誤りであるのは、人間が語るものなのである。そして、言語において人間は一致する。これは意見の一致ではなく、生の形の一致である。

こうして、「規則に従う」という概念を言語ゲームに取り入れるためには、もはや実践という概念のみならず、それを取り囲む生との関係を考える必要があるだろう。ただ、冒頭で述べたとおり、規則遵守論は主に「実践」を主題としており、生について詳細な説明をしている箇所は少ない。そのため、この議論に関係している『数学の基礎』の箇所を参考にしながら、この問題を考えたい。

生の問題を視野に入れなければ考察できないように思える問題の一つとして、規則の仮借なさという問題がある。規則に関して、例えば「+ 2」という規則に関して、我々は単に 1000 の次は 1002 と書く、ということのみならず、1000 の次は 1002 を書かねばならない、という規範性をも見て取っている。実際、我々の日々の営みの中で、ある人を前に進ませたり、あるいは他の人を留めさせたりといった、行為に集約されないより広い脈絡において「規則に従う」ということが語られているというのは事実である。それゆえ、我々がいかに行為するのかという実践のみから規則遵守を考えることはいまや不十分であり、より広い文脈の中で規則の仮借なき役割を考察する必要がある。

規則に従うならばかくおこなわなければならない、とはどのようなことであろうか。例えば、未知なる民族の未知なる言語において、我々が彼らは規則に従っていると言えるためには、先の実践概念の他に、彼らの生においていかなる概念が必要になるのだろうか。例えば、彼らが自立的に行為しており、慣習のもとで、規則的に、一致して（等々）行為していながら、しかし我々が通常おこなうように、誤った行為に対して非難をすることのない場合はどうなるだろうか。例えば、「+ 2」という記号に対して、

正常な生徒が 0, 2, 4...と書いていく一方, ある生徒がそれと一致せずに 0, 1, 2...と書いたとして<sup>17</sup>, 後者の生徒を教師が叱ったり, 引き止めたりしなければ, それは単なる慣習にとどまり, 規範性を持った規則とは呼べないであろう. あるいは, 教師がその生徒に対して感心して, 「心理学的に興味深い. どうして君はそれが正しいと思ったのか」と言うとしたら, それはもはや「+ 2」という表記を見たときの人間の行動の傾向性を測定する実験のようなものであって, 規範性を持った我々の「規則」とはまったく別のものと言わざるをえないだろう<sup>18</sup>. そして同様に, 正しい行為をおこなう生徒に対して励ましたり, 続けさせたりすることが, 規則に従うということの生における重要な特徴と言えるだろう. そこで, 差し当たり次のように言えるように思う. 規則に従うということは, 正しい行為を肯定し, 誤った行為を否定するという位置づけを我々の生の中に持っていなければならない. ウィトゲンシュタインもまた, この問題を自覚していたと思われる. 彼は『数学の基礎』において, 規則遵守を取り巻く様々な状況に問題の焦点を当ててから, 次のような想定をおこなう.

もし二匹のチンパンジーの一方が一度地面に | - - | と書き付け, それからもう一方が | - - | | - - | 等々という列を書き付けたとしても, 前者のチンパンジーが規則を与えたのでもなければ, 後者がそれに従ったのでもないだろう.

しかし, もしそこに一種の教育や方法教示と模倣, 試みの成功や失敗, 賞賛や罰といった現象が存在したならば, そしてもしそのようにして訓練されたチンパンジーがようやく, 最初の例のような列において, 今まで見たことのなかった図を順に書いたとしたならば, そのとき我々はおそらく, 一方のチンパンジーが規則を書き下しており, 他方がそれに従っていると言うべきであろう<sup>19</sup>.

17 厳密には, このような仮定は不可能である. というのも, それらの行為が一致しているか否かは規則によっているが, しかしその記号が規則であるか否かがこの場合明らかでないからである. しかし, この想定は現に「+ 2」が規則であり, その意味を知っている我々における反事実的な想定であるので, ここでは不問のこととしたい.

18 RFM, pp 389-390 を参照.

19 RFM, p. 345.

ここでは明らかに実践を超えた生における規則遵守が視野に入れられている。したがって十分に規則遵守の問題を考察するためには、この生における規則遵守の諸概念を取り上げる必要がある<sup>20</sup>。そこにはウィトゲンシュタインが示唆したとおり、教育や模倣、賞罰も含まれるかもしれないし、さらにそれ以上の様々な概念がここに含まれている可能性も十分考えられる。しかし、本稿ではこれ以上の考察へとは進まず、「生」という概念と規則遵守に関する上のような示唆をおこなうことに留めておきたい<sup>21</sup>。

## 6 言語における一致と生の形の一致

議論を 241 節へ戻そう。ここでは具体的な生における諸概念ではなく、「生」のより基本的な意味が示されている。とりわけ、「言語における一致」と「生の形の一致」という表現の並列の意義を明らかにすることで、言語と生について考えてみたい。

この節冒頭の問いは、一致することなしに規則に従えない、ということを受けて、それでは我々が一致する行為が正しい規則なのか、と問うている。これはおおよそマルコムと同じ立場に立った問いと言えよう。この問いに対して、正しいのは、あるいは誤りであるのは我々の語るものだ、という応答が意味するのは、いわば剥き出しの行為そのものが正しい、誤

20 とはいえ、生に着目する際に実践的諸概念を軽視することは誤解へとつながる。本稿と同じくチンパンジーの議論を引用しつつ、生の形の重要性を訴えた解釈者としてベイカー・ハッカーが挙げられる。ところが、彼らは複雑な生の形においてある人間が複雑な行動さえおこなっていれば、たとえその人間が孤立しており他者と一致していなくても「規則に従っている」と言われうる、と考えている。彼らはマルコムが主張したような孤立した人間は規則遵守できないという議論の反論として、社会において共有されるということが規則遵守に不可欠なのではない、ということを主張するためにこうした議論を提起したと思われる。しかし、確かに一致と規則について何らかの事実が問題になっているのではないということは正しいが、既に引用した『探究』224 節からして一致なしの規則遵守が意味をなすというのは誤りだと思われる。重要なことは、生の形の中で実践的諸概念に織り込まれた実践を「規則に従う」と呼ぶ、ということであり、実践とその諸概念の重要性は軽んじられるべきではない。この点について彼らの詳しい議論については Baker and Hacker, 1985, pp. 169-179 を参照。

21 この節における議論はコーラ・ダイヤモンドから強く影響を受けている。彼女は規則遵守の問題と「生」の概念との連関を主題的に論じている数少ない先行研究者の一人である。

りであるということではなく、我々がある規則の規準に従って、ある行為を正しいと言ったり誤りだと言ったりするのだ、ということだと解釈できる。すなわち、規則によって我々は一致する、という本稿の主張の「規則」を「言語」という概念に、「一致」を「正しい」という概念に適用したものだと思われる。そして言語において一致するとは、まさに「+ 2」という規則において我々の行為は一致しうるということを、特定の規則ではなく、我々の語る言語一般にまで広げた観点で語っている。そして「言語において一致する」ということは、(意見の一致ではなく)「生の形の一致である」と締めくくる。さて、単なる実践に留まらない「生」が語られてくると同時に、単なる規則に留まらない「言語」が語られてくることは単なる偶然だろうか。「言語における一致」が「生の形の一致」と並列されていることには、どのような意義があるのだろうか。ここでより根本的に、規則を含む我々の言語と、実践を含む我々の生との間の関係についてわずかながらも踏み込みたいと思う。いままでの解釈に拠れば、この言語と生についていかなる事態が明らかになるのだろうか。

まず、「言語において一致する」ということをさらに考えよう。単なる剥き出しの行動について、それが一致しているとも一致していないとも言うことはできない。我々がそれを「一致している」と語る限りにおいて、それは一致しているのである。とはいえ、単に定義において一致するということが、すなわちその語における一致なのだろうか。例えば、「+ 2」という同じ表記を使用すること、そして「+ 2とはしかじかなるものである」という定義や説明を与えることにおいて一致することが、「+ 2」という語における一致だろうか。しかし、そのときなお我々が定義されたその表記に対して、異なった適用をおこなってしまったときに、我々はその語において一致していると言えるだろうか。言えない、というのがこれまでの議論であった。それはもはや同じ語を使用しているのではないからである。同様に、単にある言語の文法規則を覚えているだけでは、その言語を正しく使用していることにはならないだろう。そうではなく、実際にその言語を一致して使用できなければならない。その上、その言葉とそれに織り込まれた生の位置づけとを理解していなければならない。例えば「痛い」と言った友人を慰めることなく、興味深く観察している人間は、「痛み」

に関して我々と同じ言語生活を営んでいるとは言えないであろう。語の定義における一致がすなわち言語における一致ではない。また、単に語を適切に使用するだけでも不十分である。言語における一致は我々の生の形の一致をも含んでいなければならない。

「生の形の一致」について考えよう。行為において一致するということだが、すなわちその生の形が一致しているということなのだろうか。例えば、0, 2, 4, 6…と書いていくことにおいて一致することが、生の形の一致なのか。しかし、そのとき我々が違う規則を適用していたらどうであろうか。「+ 2」という規則と「+ 2n (n は自然数)」という規則は異なる規則であるが、いずれも先の行為を正しいものとみなし、先の行為をおこなうことを一致した行為とみなす。違う規則に従うことを、同じ行為と考えることは可能であろうか。不可能であろう。単にカードを一枚引くということについても、様々なゲームに応じて様々な意味を持っており、それらは全て異なった行為である。「同じ」という語は「規則」という語と織り合わされている。同様に、生の形が一致していると言うためには、我々は同じ言語あるいは少なくとも互いに理解可能な言語を持っている必要があるのではないだろうか<sup>22</sup>。例えば、我々が「熱い」と呼ぶような現象について、「痛い」と同じ語で表現するような言語を使用する人々は、火傷に対する扱いが我々とは異なっていることになるだろう。したがって、単に行為における一致が生の形の一致ではない。生の形の一致は、言語の一致と深く関連していると言えるのではないだろうか。このようにして、単独で言語における一致、単独で生の形の一致を考察することはできず、互いにその意味を規定しあっているという「血縁関係」、概念の相互規定がここにおいても生じていると期待できる。

ところで、規則の自明性を解釈する際、我々は他のいかなる手引きにも訴えずに、まさに規則に基づいて行為する、ということを確認した。生についても、これに関連する議論がなされている。しかもそれは、「一致」に関する議論においてである。『探究』第二部を見てみよう。

22 しかし、この主張にはいまだ多くの検討を要する。例えば我々の生と言語を持たない猿の生とは類似性を持たないのか、といった問いも生じるであろう。

ある計算に関して、どれが正しい結果なのかということについて争いが生じることはありうる（例えば長い加法に関して）。しかし、そのように争いが生じることは稀であり、短い期間のことである。その争いは、我々がそう言うとおりの、「確かさをもって」採決されうる。

数学者たちの間では、一般的に、計算の結果について争いが生じることはない。（これは重要な事実である。）——そうでなかったならば、例えば数学者が、数が気付かれずに変化したのだとか、記憶が自分や他の人を欺いたのだ、等々と確信しているなどといったときには——「数学的な確かさ」という我々の概念は存在しなかったであろう<sup>23</sup>。

この箇所は第一部の 240 節に対応している。そして第二部ではさらに続いて、次のような議論が展開される。

しかし、例えば私は、数学の確かさはインクと紙の信頼性に基づいていて、と言いたいのだろうか。そうではない。（それは循環論法だろう。）——私はなぜ数学者たちの間で争いが生じないのかを言っていたのではなく、ただ争いが生じないということと言っていたのである。

ある種の紙とインクでは人は計算できないだろう、すなわちもしその紙とインクがある奇妙な変化に従っていたとしたら計算できないだろう、ということは確かに正しい——しかし、紙とインクが変化することとは、やはり再び、記憶やら他の計算手段との比較やらを通じてのみ明らかにされうるはずだろう。そして再びいかにして人はこれらの計算手段を検査するのか<sup>24</sup>。

受け入れるべきもの、与えられるものは——こう言うことができよう——生の形なのである。

23 Pl. p. 192.

24 この箇所に関しては、査読者により誤訳の指摘を受け、一部訳文を訂正したことに言及しておく。

経験的事実に数学の確かさの根拠を求めることはできない。なぜなら、その経験的事実の確かさもまた、何らかの確かな尺度によって測られていなければならないからである。そしてその役割こそ通常数学が担うものである。こうして、我々が一致するということ、紙とインクの形が恒常的であるということ、このように我々には、何の根拠にも拠らずにまず与えられており、確かであるとすべき基盤（「我々の言語が働く足場」）が存在しなければならない。我々はそれを、なぜそうなのかという理由や根拠なしに、まさにそうであるものとして受け入れなければならない。ここでウィトゲンシュタインの語る「生の形」とは、そのようなものとして言われている。

こうして、我々の生は何よりもまずそのようにあるものであり、何よりもまず我々が受け入れるものである。言語もまた、何よりもまず我々がそのように使用するところのものであった。「言語ゲーム」という概念は、言語を話すということが生の形の一部であるということを明らかにするという意図をもって使用されている<sup>25</sup>。そしてとりわけ規則に従うという実践もまた、生の形に組み込まれている限りにおいて、根源的なものとしてまず行為するのだということは自然なことと言えよう。すなわち、この規則に対してこのようにおこなうということは、まず受け入れるべき我々の生の形の一部であったということが理解されるだろう。

そしてまた、生の形の一致は言語を語ることなしにはありえない。我々は言語において一致するからである。規則と実践が織り合わされて「規則遵守」が成り立っているように、言語と生における諸活動とが織り合わされて「言語ゲーム」が成立していると考えたい。しかし、このように言うとき、規則と実践とが本質的に切り離せないことと同様、ここで一方に言語、もう一方に生、という互いに独立した二つの概念を配置し、それらを結合させたものが考えられているのではない。それらは本質的に織り合わされているのではないだろうか<sup>26</sup>。

最後に、規則遵守論を締めくくる 242 節に触れて終わろう。文法命題は、その定義の言葉からは意味が規定されておらず、それを我々がまず受け入

25 § 23.

26 しかしこの点についても多くの問題（例えば動物の生について）を考える必要がある。

れることによって、あるいはそれを文法命題として受け入れることによって、その意味が確定される、ということは既に触れた。このことは 242 節を理解する手がかりとなるだろう。

242. 言語による意思疎通に属しているのは、単に定義における一致だけではなく、（これは非常に奇妙に聞こえるかもしれないが）判断における一致もまたそうである。これは論理を破棄するように見えるが、そうではない。——測定方法を記述することと、測定結果を発見し、発言することとは別のことである。しかし、我々が「測定」と呼んでいることはまた、測定結果の恒常性によっても規定されている。

言語ゲームは、定義における一致のみならず、判断における一致（これは行為における一致であり、生の形の一致に含まれる）を含んでいる。それら二つは同一のものではない。しかし、その語の意味は生においてまさにそのようにあるということ（例えば我々が 1000 に「+ 2」を適用したら 1002 と算出すること、計算によって我々は分け前を適切に分配すること、等々）によっても規定されている。たとえ定義が一致しても、それに対する判断が一致しなかったならば、そしてその語を取り巻く我々の生き方が異なっていたならば、同じ言語を使用しているとは言えないであろう。というのも、言語と生とが織り合わされてこそ一つの言語ゲームだからである。

## 7 終わりに

本稿では、規則という概念及び規則に従うという表現の文法を、実践という語の文法、とりわけそれを取り巻く実践的諸概念を展望することによって明らかにすることを試みた。規則という概念は実践と切り離しては意味を持たない。実践という概念は様々な実践的諸概念と結びついており、それらとの関係は文法的な関係、意味を互いに規定しあう関係であった。こうした諸概念を通して、規則に従うということのあり様を展望した。そして、規則に従うという現象を更に広い視野から眺めるときに必要となる

我々の生という概念と、それに織り合わされた言語という概念について、それらの概念の重要性とそれぞれの間の不可分な関係性を示唆することを試みた。規則はその規則によって直接規定されている行為の仕方のみならず、その規則を取り巻く我々の生における位置づけによっても規定されているということを論じた。そして、規則と、我々の生のあり方は、何よりもまず受け入れるべきものであった。そして我々の言語と我々の生とは織り合わされているのではないか、という見通しを立てた。しかし、こうした生に関する考察は、いまだ多くの検討を必要とするものである。

今後の課題としては、まず規則に従うという実践を更に明晰化することが挙げられる。そしてまた、今回は示唆するに留まった「生」という概念について、更に踏み込んだ考察をおこなうことも必要であろう。この試みは、規則遵守論解釈においても意義があるだろうし、また更なる問題（例えばウィトゲンシュタイン哲学における「生」の概念、とりわけその「言語」との関係性）を扱う際にも手がかりとなると予想している。

### 参考文献

- Wittgenstein, L., *Philosophical Investigations* (3rd edition), Blackwell Publishing, 2001. (邦訳: 藤本隆志訳『ウィトゲンシュタイン全集 8』, 大修館書店, 1976 年)
- Wittgenstein, L., *Remarks on the Foundations of Mathematics* (3rd edition), Blackwell, Oxford, 1978. (邦訳: 中村秀吉・藤田晋吾訳『ウィトゲンシュタイン全集 7』, 大修館書店, 1976 年)
- Baker, G. P. and Hacker. P. M. S., *Rules, Grammar and Necessity*, Blackwell, Oxford, 1985.
- Baker, G. P. and Hacker. P. M. S., *Scepticism, Rules & Language*, Blackwell, Oxford, 1984.
- Diamond, Cora, "Rules: Looking in the Right Place," in D. Z. Phillips and Peter Winch (ed.), *Wittgenstein: Attention to Particulars*, Macmillan, 1989.
- Diamond, Cora, "Secondary Sense," in *The Realistic Spirit: Wittgenstein, Philosophy, and the Mind*, MIT Press, 1991.
- Kripke, Saul, A., *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Blackwell, Oxford, 1982. (邦訳: 黒崎宏訳『ウィトゲンシュタインのパラドックス』, 産業図書, 1983 年)
- Malcolm, Norman, *Nothing Is Hidden*, Basil Blackwell, 1989.
- McGinn, Colin, *Wittgenstein on Meaning*, Blackwell, Oxford, 1984. (邦訳: 植木哲也・

塚原典央・野矢茂樹訳『ウィトゲンシュタインの言語論 クリプキに抗して』,  
勁草書房, 1990 年)

Mulhall, Stephen, *Inheritance and Originality: Wittgenstein, Heidegger, Kierkegaard*,  
Oxford University Press, 2003.